



同志社大学21世紀COEプログラム

一神教の学際的研究

文明の共存と安全保障の視点から

研究成果報告書

2006年度

86-111

後藤敏文

「古代インドイランの宗教から見た一神教」

同志社大学21世紀COEプログラム
一神教の学際的研究
 文明の共存と安全保障の視点から
 研究成果報告書

目次

はじめに	4
2006年度活動報告	6
1.部門研究会報告	
部門研究1「一神教の再考と文明の対話」研究会記録	
2006年度第1回研究会	14
2006年度第2回研究会	
三宅威仁「キリスト教における世俗化・近代化に対する対応 —プロテスタント(宗教社会学)の立場から—」	17
マイケル・シーゲル「キリスト教における世俗化・近代化に対する対応 —カトリックの立場から—」	37
2006年度第3回研究会	
河井徳治「スピノザ:西欧思想史に見る異性体 —その神観と倫理・政治思想—」	55
飯島昇蔵「Machiavelli, Spinoza and Leo Strauss —Philosophy and Religion—」	69
2006年度第4回研究会	
後藤敏文「古代インドイランの宗教から見た一神教」	86
丸井 浩「宗教伝統の権威論証とインド哲学:護教論理と寛容精神」	112
部門研究1・2合同研究会(2006年度第5回研究会)記録	
中田 考「イスラームの現在」	145
飯塚正人「イスラームの現在」	159
部門研究2「アメリカのグローバル戦略と一神教世界」研究会記録	
2006年度第1回研究会	
山口 昇「米軍のトランスフォーメーション:アメリカの軍事戦略は変わったか」	192
2006年度第2回研究会	
石川 卓「米国の大量破壊兵器不拡散戦略とイランの核開発問題」	203
2006年度第3回研究会	
宮家邦彦「アメリカ外交と中東情勢」	227
河野 毅「暴力とテロリズム:東南アジアからみた米国の対テロ対策」	237
2006年度第4回研究会	
会田弘継「米中間選挙を読む —福音派の動きを軸に—」	250
村田晃嗣「中間選挙後のブッシュ外交」	265
部門研究3「日本宗教から一神教への提言」研究会記録	
2006年度第1回研究会	
安藤礼二「大川周明と折口信夫 —明治期の宗教思想家たちと『一神教』—」	288

2. 特定研究プロジェクト報告

特定研究プロジェクト2「イラン・イスラーム体制における西欧理解」研究会記録…………… 306

特定研究プロジェクト3「一神教世界における科学と近代化」研究会記録

2006年度第1回研究会…………… 308

2006年度第2回研究会

松永俊男「ダーウィニズムと自然神学」…………… 310

2006年度第3回研究会…………… 321

特定研究プロジェクト5「イスラームにおける他宗教との共存 —伝統と現代への対応—」研究会記録

2006年度第1回研究会…………… 323

3. 公開講演会報告

勝村弘也「古代エジプトと聖書 —知恵文学の比較を中心として—」…………… 328

アッザーム・タミー「中東紛争の根源」…………… 348

エリ・コーヘン「イスラエル —民主主義、宗教、そしてイスラエル・日本関係について—」…………… 350

ファイサル・ハサン・トゥラード「中東の平和と安定とサウジアラビア王国の役割」…………… 352

吹田 浩「古代エジプト人の神々」…………… 356

4. シンポジウム・ワークショップ報告

「宗教と社会」学会との共催公開テーマセッション…………… 374

第2回中東学会世界大会…………… 375

トルーマン研究所との共催シンポジウム「パレスチナとイスラエルの対話 —この一年を回顧する—」… 376

CISMOR国際ワークショップ2006「『ヨーロッパ』という自己理解と一神教」…………… 377

第2回CISMORユダヤ学会議「ユダヤ学の多様性:取り巻く異文脈との対話」…………… 378

学術交流協定機関との共催シンポジウム「『新中東』の光の下のスンナ派・シーア派関係の未来」… 379

5. 教育プログラム

2006年度マレーシア夏期研修プログラム…………… 382

語学インテンシブ・コース…………… 383

6. 新聞記事…………… 386

執筆者紹介…………… 390

2006年度事業推進担当者一覧…………… 391

事業推進担当者研究業績…………… 392

2006年度共同研究員一覧…………… 397

学術協定提携一覧…………… 401

2006年度来訪者記録…………… 401



 部門研究1 2006年度第4回研究会 報告

「一神教と多神教:インドの《一神教》理解について」

日 時／2006年12月16日(土)

会 場／同志社大学 東京オフィス 大セミナールーム

発 表／後藤 敏文(東北大学大学院文学研究科教授)

丸井 浩(東京大学大学院人文社会系研究科教授)

コメント／澤井 義次(天理大学人間学部教授)

中田 考(同志社大学大学院神学研究科教授)

スケジュール

13:00～14:00 発表:後藤敏文「古代インドイランの宗教から見た一神教」

14:00～14:10 休憩

14:10～15:10 丸井 浩「宗教伝統の権威論証とインド哲学:護教論理と寛容精神」

15:10～15:25 休憩

15:25～15:35 コメント:澤井義次

15:35～15:45 コメント:中田 考

15:45～17:30 ディスカッション

18:00～20:00 懇談会

研究会概要

『リグヴェーダ』とゾロアスター教は同時代の隣接舞台に存在しており、言語的にも共通の源から発している。後藤氏は今回の研究発表で、インドイラン共通時代に焦点を当て、印欧語族拡大の歴史と、「一神教」を語る上で無視することのできないゾロアスター教が有する壮大な背景の一端を紹介した。氏はまず『リグヴェーダ』の「天と大地の歌」の中に多数例示されている語彙や観念の歴史的背景に着目しつつ、比較言語学の見地から印欧語の言語的、概念的な広がりを含めた。次いでインドイラン共通時代に見られる「DevaたちとAsuraたち」という神々の二重構造に注目する。そこには従来型の神々である「Devaたち」の他に、印欧語祖語に起源を辿ることのできない「Asuraたち」という社会制度の神々を見出すことができる。その神々をめぐる神話中に見られる末子相続からは、これまで印欧語族には全くなかったと言われてきた母権社会がインドイランに出現し、変革をもたらしたことが知られる。また、ギンブタスの所謂クルガン文化の拡大からは、紀元前4500年頃、それまで女性中心の平和な自然状態にあったヨーロッパに、ドナウ下流域から突如防塞都市が出現し広がってゆく過程が跡づけられる。マリア・ギンブタスによると、この防塞都市の出現は、攻撃的な印欧語族が西へ拡大したことに起因する。これらのことから、印欧語族が東西に拡大し、その過程で母権的社会と遭遇したことが推測される。東に進出したインドイラン語派の人々の社会には、そこから逆に影響を受けた痕跡が認められる。また氏はゾロアスター教の主神「アフラマズダー」の「マズダー」を理性と解釈し、そこにゾロアスター教の特性が見られる可能性を指摘する。常に善悪を判断し、悪を排除する思考によって規定される性格である。インドの『リグヴェーダ』にも、自らの世界観の優先を謳う宣言は数多く見られる。善悪二元論、信仰告白的要素や極度の個人主義の根底には、印欧語族の攻撃的拡張主義と関係する要素があるように思われる。国教



となったゾロアスター教では、部族や信条を守る武器として支配権という政治力学が重視され、次第に攻撃的性格を強めてゆくが、それは西方イランへの進出の過程で不可避であったと思われ、また、印欧語族の拡大の歴史の中で繰り返し起きたことと軌を一にしている。世界史を紐解くと、そこには一言語(語派またはその下位の部族)による支配拡大、覇権奪取が散見される。世界史は印欧語族の拡張主義によって動いてきたと言っても過言ではない。しかし、そのような拡張の歴史の中に、アリストテレスに代表されるような「普遍的理性」の拡張もあったことに思いを致す必要がある。

丸井氏は、一般的に神秘主義的・実践的傾向が強いと見られるインド哲学の主知主義的側面を掘り下げ、特に宗教的権威をも論理的討究の地平へと持ち込もうとした〈ヴェーダ聖典の権威論証〉の議論を取り上げた。具体的には、相対立する二系統の哲学伝統(ミーマーンサーとニヤーヤ)の権威論証の議論を対比させながら分析した上で、同議論は宗教的ドグマの擁護に終始する護教主義一辺倒では決してなく、むしろその脱ドグマ的論理へと押し広げようとする主知主義の営みが、他宗教の権威論証の可能性をも引き寄せる結果となり、すぐれて論争的な性格を帯びているにせよ、それなりに宗教間対話の道筋を開くインド的思惟の一事例と見なしうるのではないか、という方向性を示唆した。以上が丸井氏の発表趣旨の中核であるが、より詳しくまとめるならば、最初に西洋の哲学概念とは少なからず異なる「インド哲学」の特質を、「ダルシャナ」という概念の掘り下げを中心に説明した。ダルシャナとは特定の世界観、伝統的思想体系であり、かつ思想体系の骨子にあたる根本テキストに適宜、後代の解釈が付加されてゆく学知の伝統の総体を意味する。そうした伝統知は師から弟子へと伝授すべきものと理解され、その意味で党派的性格を有していたが、同時にそこでは他の党派に伝達、納得させるための超党派的な反省知・論理的思考も重視された。とりわけそれは、仏教論理学者によってバラモン批判が展開されて以降(6-7世紀頃)、知識の源泉、判断根拠、正しい認識とその獲得手段を意味する「ブラマーナ」を巡って哲学的議論がダルシャナ間、異宗教間に活発になされたところに見られる。各ダルシャナ間の相違はあるものの、重要なブラマーナとして「知覚」(認識論)、「推理」(論理学)、信頼すべき言葉、教示を意味する「シャブダ」の三つが挙げられる。しかしとりわけ、シャブダを独立したブラマーナとして認めうるのかという議論は、哲学(論理)と宗教がせめぎ合う議論としてブラマーナ論においても特異な位置を占めていた。シャブダにはヴェーダを始めとする聖典が含まれるからである。それ故に、シャブダに関するブラマーナ論は、バラモン系正統派においてはヴェーダ聖典の権威論証の問題と関係して議論された。氏は、ニヤーヤとミーマーンサーの両ダルシャナの論争を取り上げた。両ダルシャナともヴェーダ聖典の権威、ブラマーナとしての妥当性を認めたが、ニヤーヤはそれを「他律的」な権威だと考える。つまり、ヴェーダ聖典の権威は決して自明ではなく、それを語る者の資質によって成り立つのであり、とりわけ話者の知覚(覚知、神秘的直感も含みうる)に依存するものである、とする。一方で、ミーマーンサーにおいてはヴェーダ聖典の権威はそれ自体で保証される。ヴェーダ聖典もシャブダである限り、その妥当性は話者の資質に掛かっているとするニヤーヤに対し、それでは知覚などのブラマーナは最終的に何によって基礎付けられているのかという反論をミーマーンサーは展開した。このようなミーマーンサーの理論は、仏典とヴェーダの権威を巡る宗教間対立を孕んだ仏教との論争に刺激を受けて発達した面が大きいと思われる。そこでは両者ともお互いの聖典の権威を否定しあったために深刻な対立を生んだのだが、そのことでこの議論はバラモンの思想内部の護教論的議論に留まることなく、他宗教との間の哲学的論争の性格を持つに至る。また、この論争は宗教的立場を異にする宗教的対立を越え、宗教(聖典)一般の権威問題にまで射程を広げている。つまり、全ての宗教(聖典)に権威を認めるのかどうかという問題が視野に入ってくるのである。この点に関しては、9世紀に活躍したニヤーヤ学者ジャヤンタ・バッタの論が興味深い。彼は『ニヤーヤ・マンジャリー』の中で、一定の制限を設けながらも他宗教の正当性を認める寛容主義的主張を展開しているのである。氏は、ヴェーダ聖典の権威論証を巡る護教論理と寛容精神の相克を今日の宗教観対話に接続し、考察上の示唆とすることはできないものかと模索している。

(CISMORリサーチアシスタント・同志社大学大学院神学研究科博士後期課程 上原 潔)



古代インドイランの宗教から見た一神教

東北大学大学院文学研究科教授
後藤 敏文



私たちの分野についてお話をすることが普段少ないものですから、良い機会を与えて戴いて嬉しく思っております。ただし、どんなふうに話をしたらよいのか迷っているのも事実です。今、皆様にご覧の3枚組のプリントをお配りしましたが、これを基にどうにか話を組み立てられたらと思って、出てまいりました。

そこに挙げたホームページは学生さんたちが作ってくれているのですが、今回の話題に関連する報告などもPDFで見られるようになっておりますので、また、あとで触れることに致します。

今日私がお話することの背景には、どうしても「インド・ヨーロッパ語族」という問題があります。それについて時間を割くことはできませんけれども、今日動いている「世界史」や、昨今の「アメリカ」の姿勢を理解するためには、インド・ヨーロッパ語族の拡大の歴史から目を背けるわけには参りません。それと同時に、一神教の三本柱、キリスト教、ユダヤ教、イスラーム、実はその背景、または、その脇にゾロアスター教の存在があり、歴史的にも、空間的にも、ゾロアスター教はそれらの宗教の真っ直中に位置していたわけです。インド・ヨーロッパ語族の拡大移動の歴史の中から現れたゾロアスター教の問題を抜きにして語られている現状に、私は違和感を持っています。しかし、同時に、それは現状では語りにくい分野であると理解もしています。

今回お話をするというので、この方面のことを私なりに準備したいと思っておりましたが十分に時間が取れず、お配りする資料として使えるようなものがないかと探してみるのですが、すぐに行き詰まっ

てしまいます。私は原典を読むだけなのですけれども、原典やその意味がどのように紹介されているかを調べてみますと、私たち文献学・言語学の専門家の理解と懸け離れていることに驚くこと多々あるのです。適切な例が出てきませんが、ゾロアスター教における重要概念が全く違って紹介されていることがあります。ゾロアスター教聖典『アヴェスタ』の研究が一応の安定段階に到達していない、または、知見が共有財産となるまでに成熟していない現在の状態では、ゾロアスター教が納得のいく形で議論に入ってこないのはしかたがないかと思っております。『アヴェスタ』の原典そのものの研究とその後のゾロアスター教の発展史、教義とを総合的に理解するまでに研究が至っておりません。今問題にしている話題に重要な点は、あくまでも教祖ゾロアスター(ザラトゥシュトラ)とその教団成立の問題にあると思います。

今日はそういう面を少しだけお示しして、背景にあることをいづらか紹介し、大きな役割を果たした可能性、方向性だけでも指摘できたらと思います。それが一点です。

もう一つ。「宗教」という切り口が、今後の世界理解に重要になってくるという見通しです。今後の世界ということは、要するに経済の中でと言い換えても良いでしょう。ちょっとだけお話したいと思っております。

既にご存じかもしれませんが、ドイツのインゼル、ズーアカンプなどの大出版社は、事実上一つの会社になっています。それら出版グループが共同で新たに世界諸宗教出版社という出版社を立ち上げ



ました。巨大予算を投じて、古今東西の宗教文献を網羅し、新しい学術的な訳を何百冊という叢書で出版する計画です。まず原典の翻訳から始まって、研究のシリーズ、原典出版も出す予定で、具体的な計画はほぼ固まっています。その第1巻が『リグヴェーダ』でなければならないということで、実は私が疲れ果てているのはそれでして。急に言われまして来年の4月末までに第一巻の原稿を出すべく今翻訳に取り組んでいるところです。

やはり、ドイツの出版社は、よくわかっているわけです。今手を打っておかないとドイツの文化圏が…という危機意識と、今求められていること、将来性を見込んでの企画と思われまます。これにはもちろん、日本の各宗教文献、風土記や天理教の教典なども、すべてドイツ語に訳されて収められます。誰が担当するのか覚えておりませんが、もちろん『聖書』も全部訳し直されます。我々はそう言う時代に生きているということです。

つまり、宗教という切り口と、「インド・ヨーロッパ語族」という問題、今日、私はその両方から何らかの紹介ができたかと思っています。

「インド・ヨーロッパ語族」とは何かいうことになると非常におおごとになってしまいますが、私が日本人だということで、日本にすることが有利に働いて話しやすいところがあると思います。インド・ヨーロッパ語族の一員であつたら、なかなか話しにくい点もあるでしょう。誰でもお気づきのことと思いますが、ヨーロッパ史というのはきれいごとが並んでいるわけで、現実には起こった虐殺や闘争、収奪の歴史というのは、それほど語られないように思います。教室でもそれほど教えないと思います。もっとも、子どもに教えると夜中に眠れないということがあるのかもしれませんが、しかし、本当はそれが現実でした。今『日本経済新聞』で、——大変優れた方だと思われていますが、小説家としてというよりも、誰でしたか、前に大臣をやっていた——「世界を創った男 チンギス・ハン」という小説の連載をしております、あの経

済学者の堺屋太一です。それを読んでいますと、遊牧民の原理がだいたい良く解るわけです。堺屋太一の連載に出てくるモンゴルの経済の理屈ですね。これはほとんど、それよりも2000年以上前、インドイラン語派にしても3000年程前、インド・ヨーロッパ語族の基となりますとさらにその2000年ほど前でしょうか、印欧語族がやってきたことと全く同じことをやっている部分があります。略奪が彼らにとっても、正当な経済行為だということ、大家長クラスの者だけが「人権」に当たるものをもって見られる部族社会の存在などです。そのことを今解りやすく、きれい事ではなく話しても良いのではないかと思います。

私自身、そういうことに焦点を当てて雑文を書いたことがございますが、これもそのホームページから、ただし、訂正される前の原稿ですが、読むことができますので、もし興味がおありの方はこちらから見ただけましたら幸いです。今日、三つほど抜刷、コピーも持ってまいりました。

1. 『リグヴェーダ』の「天と大地の歌」

まず、その辺りの事情について解りやすい例として、『リグヴェーダ』の「天と大地の歌」の一つを私の翻訳で紹介したいと思います。これは『リグヴェーダ』の比較的新しいところに収められています。文献学者というのは困ったもので、これは新しいとか、これは古いとか、文献の層で分ける癖があります。しかし、現実に古い要素が新しいテキストに蘇って出てくることはよくありまして、これは新しいといわれる歌ですが、古い思想を見事に伝えている点があります。読んで解釈していくとこれだけで1時間半かかってしまいますので、主要要素を少しだけ拾い集めてみましょう。讃歌自体は難しい歌です。どういふふう難しいかといひますと、「天と大地の歌」といひながら、実際にはそれを創った神を讃えます。同時に、その天と大地の子である太陽とを讃えていて、それらの関係が構造としてよく見えてきません。



部門研究1

「一神教の再考と文明の対話」研究会

この中に古い要素が見られます。例えば、順番に行きますと2行目、「天理」と訳したのは「リタ」(または「ルタ」という語で、普通「天則」と訳されています。天の法則。私は「天理」と訳した方がよいと思っています。天の理法です。これは「ぴったり嵌っている」を意味する動詞から作られた形容詞で、動形容詞をそのままアクセント移動なしに使っている、その意味でも注目に値する語です。これが『リグヴェーダ』の最高原理といえるものです。川が下へ流れるのは、このリタ (^{イタリフ}ṛtá-) に従っているもので、海に水が注いでも海があふれないのは、リタのおかげです。それは宇宙法則で、解っている人には解る。その能力はマーヤー (¹⁷māyā-) と呼ばれ能力に連なりますが、あとで触れるかもしれません。これは大事な要素です。

次に見者、カヴィ(kávi-)。これは「見る人」ですが、古い語彙で、動詞としてはもう殆ど使われなくなっています。何を見るのかというと、僕らものは見ているわけで、そういう意味ではなく、具体的には『リグヴェーダ』の詩の言葉を見る人ということになります。より正確には、ものの真実が見え、それに霊力の籠もった詩のことばという形式を与えることができる者、というべきでしょうか。しかも、「がたがた震える」、「荒れ狂う」という語もこの人たちについて用いられますので、誤解に注意しながら敢えて言えば、一種のシャマニズム的な興奮状態で「ものを見る」人と言えらると思います。そのような興奮状態で、そうした言葉を見ることのできる人たちのことをカヴィと呼んでいます。

この語はイランでは「王、諸侯」という意味で今日まで使われますが(アヴェスタkauii-, 現代ペルシャ語kei)、その背景には、インドイラン共通時代の、部族長と祭官(一種のmedicine man)が部族を率いていた社会のあり方があります。さらに、アヴェスタに見られるこの語の活用は古い形式を保っていて、ラテン語のウァテース(uātēs)「見者、予言者、(後に)詩人」、ケルト語で同じ意味の、例えば古アイルラン

^{イタリフ}ド語 *fáith*、と同じ古い *-i-*語幹の活用をします。つまり、基に古い単語があって、その語意を担う部分はすっかり置き換えられてしまったのに、もとの語がもっていた活用タイプ自体を残している不思議な現象の一例です。私はもともと印欧語比較言語学が専門ですので、どうしてもそちらのほうに話が行ってしまいます。目に見えないところに古い遺産が隠されている例として興味深いと思います。

それから、3行目の「神」という単語はもちろんラテン語のデウス「神」に当たる単語です。ラテン語を引く場合は時代によって形が異なるので困りますが、*diūs*、*deus*、古ラテン語で *deiuos* です。基の形がそこに挙げておきましたように ¹⁷**deiuó-*で、ラテン語特有の複雑な音韻変化の、時代的变化その他の可能性から異なる形が導かれるためです。意味は「天に存する」という形容詞です。『リグヴェーダ』には「天に属する敷き草」とか、「天に属する戦車」など、依然「天にいる、天にある」という形容詞としての使用が見られます。ラテン語とインドアーリヤ語では、この語を「神」という意味で用います。勿論ほかの言語にもあります(古アイルランド語、北欧語、リトアニア語など)。順序が逆になりましたが、「天に存する」というこの形容詞は、もともと、「天」という語からある形容詞派生法によって作られたものです。その「天」という語が1行目にあります。インドのことばでは *dyáus*、ギリシャ語のズデウス、後の発音でゼウス *Zeús* と同起源の語です。快晴時の昼に見える輝く覆いのことばのようです。「父なる天」という表現はインド・ヨーロッパ祖語に遡り、リグヴェーダの *dyáus pitá*、ギリシャ語の *Zeús [...]* ¹⁷*patér* などがそれです。ラテン語の *Iuppiter* は *Iu* の部分が *dyáus* に、*piter* の部分が「父」に当たり、*-pp-* は呼びかけの時の強調による形と考えられています。

それから、次にすぐディシャナーという単語が出てきます。私はこれまで「斎の場」と訳してきましたが、この資料を用意しているときに気づきまして、



「両祭礼の場」と直しました。この単語は非常に古い祭礼用の語彙に遡ります。基の意味は既にインドでも忘れられつつあったようで、『リグヴェーダ』の詩人たちにも古語であったらしく、女神の一種と考えていた節があります。ギリシャでも名詞にだけ痕跡のように残る語で、それが即ちテオス「神」です。私たちの研究というのは成果が一般に普及するまでに何十年も懸かりますので、まだ一般の概説書に載るところまで至っておりませんが、この語源には疑う余地はないでしょう。ラテン語 *fēstus* 「祭礼の」、*fēstum* 「祭礼」、*fēriae* 「祭日」、*fānum* 「寺院」もこの語彙グループに遡ります。今日英語で *fest* というのはラテン語からの借用語に遡りますが、その元にある、その時に祭礼をやるだけではなくて、英語でフェア *fair*、ドイツ語のメッセ *Messe* が意味するように、市が立ち、人々が集まるという、どうも、そういう時の用語であったと思われる。ところが、各言語、国家、民族が受け継いでいった伝統というのは、これとは違った、組織された祭式になっていくわけです。それには、もちろん階級や部族のいろいろな問題が入ってきますが、それ以前にあった、原初の時代の祭式用語だったらしい。もう既に、各言語で痕跡のようになっています。その単語がここに使われています。

それから次に行くと、「大胆」ということ。これが優れた美德でありました。若い男女で、しかも、着飾っていて、大胆で美しいわけですね。それがこの人たちの求めるものであって、目立ってはいけないというような観念ではありません。その「大胆」という単語は英語の *to dare* と全く同じ語源に遡りますので、そのことから、非常に古い要素を保っていると言えるでしょう。

次に「仕事のできる」のところに飛びましょう。「仕事のできる」、これはアパス (*apas-*) という単語ですが、アクセント位置が変わり、ギリシャ語を知っている方はよく同じ現象をご存じだと思いますが、

apas- になりますと「仕事」の意味になります。その *apas-* の方はラテン語の *opus* とまったく同じ単語です(印欧祖語 **h₂épes-* または **h₂ópes-*)。 *opera* 「仕事、努め、尽力」はこれから作られた女性名詞、ラテン語の *operārī* 「働く、儀式を執り行う」、ドイツ語の *üben* 「行う、実行する、練習する」は、これから作られた名詞起源の動詞です。そういうわけで、ここにも古めの、『リグヴェーダ』以降にはあまり使われない単語が出てきます。イラン側ではこの単語は複合語の中に残るだけです。因みに、「作る、する、為す」という動詞としては、インドでは、*kar/krī* が^{イタリフ}普通で、今日まで用いられます。その名詞形が「業」と訳される *kárman-* (カルマ) です。イラン語諸方言でも事情は同じですが、『アヴェスタ』では「する、行う、行動する」意味の代表的動詞には、英語の *to work*、ドイツ語 *wirken* に完全に対応する別の語彙が用いられます。そこに割と重要な問題が隠されている可能性もあります。

それから、「大きな名声」、「高い支配権」。これは何らかの表現で各言語に残っていると思われる。「大きな名声」はギリシャ語に全く同じ表現があります。マヒ シュラヴァス (*máhi śrávas*) は、ギリシャ語のメガ クレオス (*méga kléos*) に一音ごとに完全に対応しております。「高い支配権」のほうは、ちょっと探してみたのですが、見つかりませんでした。「支配権」という単語は各言語で、割と置き換えられることが多いという事情もあります。「高い」という言い方が面白いのです。この単語だけでも現代にまで連なる興味深い話題になりますが、今日は省きます。

次にオージャス (*ójas-*) ですが、「力」、特に「肉体の力」を意味すると考えられます。これに当たるラテン語から作られた「肉体の力を備えた人」がローマの初代皇帝アウグストゥス *augus-tó-* です。

肉体の力、名声、支配力、拡張、大胆、美しい、そういう徳目がここに並んでいるという、それが興味深いところ。この世界観は揺らぐことなく、ヨー



部門研究1

「一神教の再考と文明の対話」研究会

ロッパでずっと受け継がれていくように思われます。インドでは、仏教が起こる頃から変質していくのではないかと見ています。例えば、挨拶の仕方も変わります。ヴェーダ期の挨拶は、両手をこう前に広げてかざす。これが敬意の表し方(後に「南無」と訳されるナマス *námas-*)で、各言語に、ギリシャにもローマの文献にも同じ表現が、ただし、別の単語を用いて出て参ります。イランの『アヴェスタ』は、ゾロアスターの一番初めのことば、『ガーサー』の28の1ですが、「両手を開き展げ、敬意を表わしつつ、私は君たちに助けを乞う」という詩で始まります。『リグヴェーダ』のそれに対応する単語が用いられています。「君たちに」というのはアフラ・マズダーとそれに属する者たちです。

また、相手に頭を下げるという、いわば卑屈な態度は許されないようです。例えば、紀元前650年前後の文献ですが、子どもがある部族にいられなくなった場合、よその部族へ行って養ってもらえとあります。そのときに「私を養え」と言えと書かれています。そう言ったら、必ず受け入れて養わなければいけないと。その時に、「自分は養われる価値がある」とか、回りくどい言い方をした者はその場でたたき出せと書いてあります。つまり、堂々としていることが要求される、何と云いますか、勇気が試される社会のようです。

仏教になりますと、お辞儀をしたり、地面に身を投じてひれ伏すなどの敬意の表し方が出てきますね。また、おもらいさんの格好をする。それが合掌(アンジャリ)です。今は合掌はこんなふうに関手を合わせますが、もとは両掌を上に向けて前に出し、その内側の端を合わせて、こうやって捧げる格好です。それはヴェーダの祭式にも出てまいります。両掌をくぼませた部分に水を注いだりします。何かをもらう格好をすることになります。それに対して、元来の両手を広げて背筋を伸ばす姿勢は仏教では別のところに残ります。「施無畏印」といいますが。武器を持っていませんよということを示すのが元の

意味であった可能性を逆に教えてくれます。

後にそういう大きな変化が起きますが、仏教が興起する時代くらいまでは、非常に厳しい部族社会の闘争的な時代が続いてまいります。紹介しました『リグヴェーダ』の「天と大地の歌」には、そうしたあり方の基にある諸要素がよく現れていると思います。この歌は新しい層に属するといわれますが、紀元前1200年ごろにリグヴェーダ編集は基本的には終わっておりますので、それにいくらか先立つ頃の歌だろうということになります。その頃の詩人が昔の伝承を真似て、「ものを見る」ことができる人たちがいたとされる往古の精神に自分を移しかえて、歌いなぞっているものと思われまゝ。

それからもう一つ。結論的に言いまして、インドでも、イランでも、詩人たちにとっては、エフェドラ(麻黄)のアルカロイドであるエフェドリンの摂取が、詩をつくる時に役割を果たしていたようです。要するにドーピングをして、興奮状態で、がたがた震えながら「見た」言葉を集めたものということになっています。この興奮状態を得るために用いられたのが、つまり、ソーマであり、イラン語のハオマです。

一般の概説書等には、ソーマが何の植物か解らないとか、ベニテングダケという説があるとか、いろいろ書いてありますが、専門の研究者でソーマが麻黄であることを疑った人は殆どいないと思います。専門研究ではそうしたことは議論されないものです。概説などで、いざ触れなければならないとなると苦労することになり、像が歪むことが起こります。エフェドラであると、まあ、最近はそのいうところに落ち着いているとは思いますが、ときどき奇矯な本が出ますと、また、それが何年間か生き延びるという不毛な現象が起こります。

余談を一つ。ソーマ、イランのハオマはインドイラン共通時代にどこからかもたらされたものと推定されます。インド・ヨーロッパ語族本来の興奮剤は蜜酒であつたらしく、ソーマを「蜜」とか「蜜酒」と呼ぶことがあるのは古い呼称が残り、ソーマに重ねられ



たものと判断されます。第二次大戦時、アメリカ空軍は麻黄のアルカロイドであるエフェドリンの化学合成に成功しており、これを用いています。ドイツのインド学者から聞いた話ですが、ドイツ空軍では戦闘機に乗り込む時、眠気と恐怖を払うのに蜜酒を与えられたそうです。第二次大戦の空軍は、喩えてみれば、最新のドーピング技術を持つインドイラン語派對、古いアルコール飲料を用いていたインド・ヨーロッパ祖語段階の人々の戦いと言えるでしょうか。麻黄の使用がどこからインドイラン共通時代の人々にもたらされたのか、という問題については、現在進展中の考古学的発見から、状況証拠がかなり絞り込まれつつあるところですが、少しだけ後で触れます。また、第二次大戦におけるエフェドリンと戦後日本の不幸な薬物は別の話しということに。

さて、その『リグヴェーダ』は勿論インドのインダス川上流域で編集されたものですが、リグヴェーダに歌われる舞台の中心はむしろインド進出以前の地域のようなものです。インドの地名も出てきますし、インドで作られたことが明らかな歌がありますが、理念的基準、彼らが本当の生活をしていたと想定している舞台は草原、乾燥した草原で、平らな土地へ急峻な山が突然出てくるという情景ですので、だいたいアフガニスタンのどこか高原地帯であろうと考えられます。

その時代というのはイラン側にゾロアスターが現れる時代に先行し、しかもゾロアスター自身がはじめに布教した地域に重なるか、少なくとも近接します。しかも『リグヴェーダ』の言語は、ゾロアスター自身のことばを含むと考えられる『ガーサー』の言語と非常に近い特色をもっています。インドイラン語派全体を見渡しても、特別な活用タイプや音韻変化を共有する要素が見られますので、『リグヴェーダ』の詩人たちがいた環境と、ゾロアスターが出てくる母胎となった環境とは、非常に近い関係にあったと判断されます。アフガニスタンのどこか、あるいは、アフガニスタンからトルクメニスタン、イランの東北部にかけてのあたり、その辺りでの出来事であったら

うと思われま

うと思われま。その人たちがどのような神々の世界を持っていたか。実は、このことの中に、後の一神教理解の、「一神教」自体の意味するところは別に考える必要があるでしょうが、一神教を理解していく上でも大事な出発点があると思ひまして、次にその話をいたします。

2. デーヴァたちとアスラたち:

インドイラン共通時代の神々の世界

そこで次に「Asuraたち」とDevaたちについて見てみます。「Asuraたち」にカギ括弧が付いている理由を初めにお断りしておきます。「Asuraたち」という表現は『リグヴェーダ』にある形で、実際には特別な限定内容を持つものではなく、私たちが使わせてもらう時に特別な意味を込めて用いる訳です。『アヴェスタ』で *ásura*- に当たる単語は *ahura*- ですが、殆どアフラ・マズダーのことになります。まだ「(地上の)主人」の意味で『リグヴェーダ』にも『アヴェスタ』にも用例は残ってはいます。私たちはインドイラン共通時代に想定される、社会制度の神格化である一連の神々を、他にふさわしい呼称がないので、「アスラたち」と呼ぶことにしております。ただ、これを純粹のインド学者に言いますと、「おかしい」という反応が出てくることがあります。その点をお断りしておきます。

インドイラン共通時代には、この二つのグループから神々の世界が成り立っていたようです。「神々」は全てデーヴァと呼ばれますからアスラたちもデーヴァの一員ですが、狭い意味でのデーヴァは、先ほど触れました「天に存する」昔からの神さまで。自然神とか、英雄神、機能神のグループです。『リグヴェーダ』の世界では色々な概念を「神」として表象する傾向があります。色々なものが「神」というチャンネルを経ないと機能しません。その理由は祭官階級の働きに求められます。祭官階級は自分たちが社会の中で占めている役割を独占し、おそらくそのために文字を採用しませんでした。「文書」といっても書き留め